

教育効果の検証 保護者と担任の評価より

統計による「生き抜く力」の検証

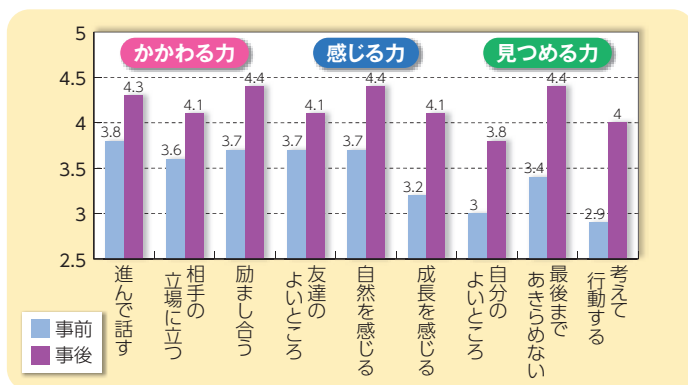
ここでは、参加者の保護者や学校(学級担任)に協力していただき、キャンプ前後の様子について実施したアンケートの結果を検証する。調査はキャンプ前とキャンプ終了1か月後に実施した。

<評価項目について>

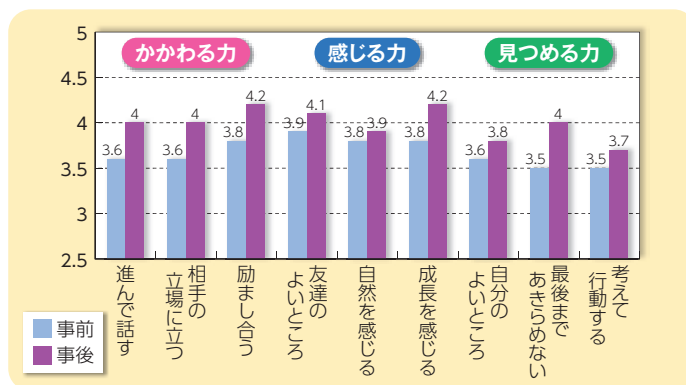
評価項目は、参加者に提示した「ふりかえりカード」の9観点と同一のものとし、参加者の普段の生活の様子を5段階で評価してもらった。また、自由記述には事前調査では「参加児童に期待すること」、事後調査では「キャンプ以前より成長が見られた姿」について記載してもらった。

かかわる力	①自分から進んで友達や指導者に話すことができる。
	②相手の立場に立って話したり、行動したりすることができる。
	③友達と励まし合って活動に取り組むことができる。
感じる力	④友達のよいところを見つけたり、感じたりすることができる。
	⑤自然の素晴らしさや厳しさを感じるすることができる。
	⑥成長できた自分を感じるすることができる。
見つめる力	⑦自分自身のよいところを見つけることができる。
	⑧あきらめないで最後までがんばりぬくことができる。
	⑨指示されるだけでなく、自分で考えて行動することができる。

* 9つの観点別の評価点の平均を事前・事後で比較し、グラフに表すと下のような推移が見られた。



「保護者の評価」



「担任の評価」

評価点の考察

- 事業終了1か月後の全ての評価点が事前に対して上回っている。本事業をとおして培った力が、家庭や学校においても活かされていると言える。
- 保護者と担任の評価点の上昇率を比べると、保護者の方が全体的に高い。これは、家庭と学校での見取りのずれと捉えるのではなく、保護者は、事業の様子をスライド視聴したことや参加者の生の声を聞くことによって、感動体験を共有し、子供の頑張りをより身近な立場で実感したからだと考える。
- 保護者の評価点の上昇率を見ると、「考えて行動する」の1.1ポイント(2.9→4.0)が一番高かった。全力キャンプをとおして規律ある生活をしたことが、家庭において指示されなくても進んで行動する姿が見られるようになったと考える。
- 担任の評価点の上昇率を見ると、「最後まであきらめない」の0.5ポイント(3.5→4.0)が一番高かった。2学期を迎え、全力キャンプで困難なことをやり遂げた自信が、学校生活でのねばり強さにつながったと考える。

自由記述より(成長が見られたエピソード)

<保護者>

- キャンプ前は手伝いを頼んでも「ちょっと待って」が多く、なかなか行動に移すことができなかつたけれど、今はすぐに行動に移すようになった。(見つめる力↑)
- キャンプ後は、何も言わなくても「やっておいたよ」ということが多く、こんなに変わるとは思わなかつた。(見つめる力↑)
- ちょっとしたことで「ありがとう」と感謝の気持ちを表すようになった。(かかわる力↑)
- やらなくてはいけないことがたくさんあって「もういいんじゃない?」と言っても、「大丈夫」と言うようになった。全力キャンプの大変さを経験したからこそ言えることだと感じた。(見つめる力・感じる力↑)

<担任>

- 元気のない友達を気にかけてたり、友達に優しい声をかけたりする姿が見られるようになった。進んで意見を発表する姿はあまり見られなかつたが、積極的に発言したり、工夫して活動したりする姿が見られるようになった。(見つめる力・かかわる力↑)
- 運動会のスピーチで間違えた時、沈黙することなく「言い直します」と言っている姿が印象的だった。(見つめる力↑)
- 廊下の隅にたまっていたごみを進んで取っている姿があった。教室のみんなの前でほめた。こういう姿がどんどん広まってくれたらいいなと思う。(見つめる力↑)
- 友達の意見を聞こうとする姿、考えのよさを引き出そうとする姿が見られるようになった。(かかわる力・感じる力↑)
- 思いどおりにいかなくても、自分で意識して「自分でキレずに我慢している」と話している。(見つめる力・感じる力↑)
- 下校時刻ぎりぎりまで、組体操のペアの子供を誘って、できない倒立の練習をあきらめずにしていた。そして見事自分の力でできた。その成長がうれしく思う。(見つめる力・かかわる力↑)

全力キャンプ終了1か月後の保護者や学級担任の見取りから、全力キャンプで身に付けた3つの力が、普段の生活において、多方面で向上していることが、具体的な場面をとおして見て取れる。もちろん、この事業だけの成果ではないが、IKR調査の結果と併せて考えると、全力キャンプは子供の生活によい影響を与えていると言える。

生き抜く力を総合的に育成することができた

成果 子供の姿を設定し、一貫して自己評価に取り組んだ

生き抜く力の基礎を3つの力「かかわる力・感じる力・見つめる力」とし、それぞれを子供の姿で具体的に表現した。更に、この姿を自己評価の指標とし、毎日、ふりかえりを実施した。

このことにより、ふりかえりの視点が明確になるだけでなく、子供が自分自身の成長を自覚することにもつながった。

成果 プログラムデザインに情報を統合した

主な活動や評価、スタッフのかかわり方等について、プログラムデザインに掲載し、スタッフが参照できるようにまとめ、携帯記録ノートに貼付した。これにより、全スタッフが、ねらいに対してぶれることなく事業を実施することができた。

成果 「生きる力」が有意に向上した

独自の指標（生き抜く力の基礎）だけでなく、「生きる力」の変容を調べ、IKR調査も実施した。事業前・中・後、1か月後と4回の調査により、子供の生きる力が有意に向上し、事業終了1か月後においても向上が維持されていることが明らかとなった。

課題 3つの力について再度検討する

今年度の子供の姿から、3つの力にかかわる「評価項目（具体的な子供の姿）」について再度検討する。また、3つの力の相関関係等についても分析を進め、より実効力のある評価項目を作成する。

課題 社会的スキルについて考察する

社会的スキル尺度により調査した結果、有意差のある向上は見られなかった。また、生きる力の「徳育的能力」との類似性から、改めて、「生き抜く力」との関連について考察し、その運用について検討していく。

連携により効果的に事業を進めることができた

成果 分担した運営が、個々のプログラムを充実させる

施設間でプログラムを分担して事業運営することで、それぞれが個々の活動に力を注ぐことができ、ねらい達成に向け効果的なプログラムとなった。また、公立施設での活動においても、公立施設の担当職員と打ち合わせを重ねた連携により、事業のねらいに沿ったプログラム提供につながった。

成果 打ち合わせ等の目的を明確化し、効率化を図る

昨年度の実績を踏まえ、目的を絞った企画会議と事前踏査にすることで、ロスの少ない会議や踏査にすることができた。

インターネット上のクラウドドライブやスプレッドシートを活用して、データを共有したり、双方からデータ入力をしたりして、事業運営に役立てた。

課題 議題のランクを整理し、情報交換の一層の日常化を図る

事業の準備においては、ねらいのような大きなランクから、準備物品の数等の小さなランクまで、多種多様な事柄が議題となる。

以下、2点の視点から一層の整理が求められる。

視点① 顔をつき合わせて議論すべき議題と、そうでないものを区別する

視点② 日常的にかかわりをもつことを意識して、小さなランクの議題は、メールや電話のやり取りをあえて頻繁に行う